

Title	訃報；昭和五八年度三田史学会大会について；昭和五八年度史学科旅行
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1984
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.53, No.4 (1984. 3) ,p.90(356)- 93(359)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19840300-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙 報

計 報

前嶋信次先生には、昭和五八年六月三日、吉田小五郎先生には昭和五八年八月二十日に逝去せられました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

弔 辞

私どもの尊敬する前嶋信次先生の靈に謹んで弔辞を申しあげます。

昭和五十一年春、先生は心筋梗塞に倒られたものの、人生と学問へのあくなき御意欲をもって奇跡的に一命をとりとめられ、再びライフ・ワークである原典訳アラビアン・ナイトの完成をめざしておられました。遙かなる未踏の山道を辿るその御姿は、私たちには不死不老とさえみえましたのに、思いがけず、この春再び病魔の襲うところとなり、御家族の御手厚い看護のかいもなく六月三日幽明を異にされました。昭和四十一年最初の巻を刊行された原典訳アラビアン・ナイトの完成を一步手前にしてのことであつたのは、先生御自身にとって痛恨のきわみであろうと存じますが、先生に導かれること多くして歴史学の道を歩む私どもは、ただ茫然とし、時をかさぬ天地をうらむのみです。

思えば先生が語学研究所員として三田山上に職を奉じられましたのは、昭和二十五年秋のことです。以来、昭和四十六年三月定年をもって文学部教授、言語文化研究所長を辞されるまで二十年

余、教育と研究の双方にわたり、卓抜な業績をあげられました。慶応義塾史学科が西アジア、東西交渉史の分野にも大きな特色を築き、少なからぬ研究者を送りこむことができたのは、ひとえに先生の賜物であります。

先生は甲斐の八代に生まれ、大正十年上京されました。東洋史の研究に魅せられ、藤田豊八博士に師事されて、東西交渉史研究の道に入られました。アジアの東と西の、大きく性格を異にする文化が古い時代から相互に交渉し、影響しあっていることを、東の漢文史料と、西のアラビア語その他の言語の史料とを対比させ、史実を的確に究める研究方法によって学界に新風を吹き込まれました。

以来、西域への憧憬がアラビア世界への開眼となり、ついにわが国におけるイスラム研究の父と仰がれるに至りました。先生御自身は、それを「迂遠の道をたどりて」と称されておりますが、イスラム研究の今日における興隆に、感無量の思いでおられることと存じます。ただ先生は、アラビア学・イスラム史・西アジア史のように一部の地域の権威とされるにはご不満のようで、私は東西交渉史であると、よくおっしゃっておられました。「史学」誌上に発表されました「元来の泉州と回教徒」「タラス戦考」「テリアカ考」などの名篇は、その御研究の一端であります。実にわが三田史学会を今日あらしめる上で、大きな力となったものであります。

しかも専門に限らぬ広い学識は、三田の山で先生にふれる学徒に限りない感動を与えて下さいました。また、御生前、先生のご

指導を受けましたものは誰しも、先生が行き交う人々にお向けになる温容を、何時までもありありと眼前に思い浮かべることでありましょう。

東西の書籍に酔いしれる前嶋先生、旅と散策、そして古典音楽をこよなく愛された前嶋先生。

かけがいのない巨匠を失って、わが慶応義塾大学史学科、そして三田史学会の関係者は途方にくれております。しかし先生の御意志を継ぎ、奮起して先生の切り開かれました学問をさらに発展させるよう全力を尽すことが、先生の学恩に報いる唯一の道であると、心に固く誓うものであります。

謹んで御冥福をお祈りし、御生前の御厚情に心から感謝いたし、お別れのことばと致します。

昭和五十八年六月六日

三田史学会会長 河北 展生

吉田小五郎先生を偲ぶ

高瀬 弘一郎

吉田小五郎先生は昭和五十八年八月二〇日郷里柏崎市で逝去された。享年八一歳であった。先生は明治三五年一月一六日生れで、大正一三年慶応義塾大学文学部史学科を卒業され、直ちに慶応義塾幼稚舎教員となり、昭和四〇年退職なされた。この間同二二年から三一年まで幼稚舎長を勤め、また二三・二四の両年慶応義塾大学文学部講師として「国史特殊」（キリシタン史）を講義された。さらに慶応義塾評議員・塾史編纂所員をも勤められた。同二

四年度には「教育実践上の業績」により、二六年度には、「福沢先生に関する新出史料の研究」（他の六名と共に）により、夫々義塾賞を受賞なされた。

先生は学生時代から幸田成友博士に師事し、その影響もあって一貫してキリシタン史研究の道を進まれ、わが国におけるその分野での指導的立場に立たれた。先生は数多くの著作を残されたが、まずキリシタン史研究の面での主な業績を挙げると、シュタイン著『切支丹大名記』（大岡山書店、昭和五年）とパジェス著『日本切支丹宗門史』（岩波文庫全三冊、昭和一三〜一五年）の訳業は、西欧の基本文献のわが国への紹介移植であり、特に後者はその原著の内容が優れていることもあって、その後のキリシタン史研究の進歩のために果たした功績は計り知れない。この訳業により先生は国民学術協会から表彰された。近年キリシタン史研究は目覚ましい進歩を見せているが、それも先人のこの種の貴い業績の上に築かれたものであることを忘れてはならない。特にフランシスコ・ザビエルには、先生は強い関心をお持ちになり、『聖フランシスコ・シャギエル小伝』（大岡山書店、昭和七年）や『ザヴィエル』（吉川弘文館発行人物叢書、昭和三四年）などの著述をなされた。ザビエルの人物像をわが国に普及浸透させる上で重要な著作である。また『キリシタン大名』（至文堂、昭和二九年）は平明な文章で説かれたキリシタン通史として、現在でも初学者向けの基本文献としての価値を失っていない。

さらに先生の大きな業績に『稿本慶応義塾幼稚舎史』（昭和四〇年）・『慶応義塾幼稚舎史目録』（昭和四〇年）・『稿本慶応義塾幼

稚舎史(戦後篇)』(昭和四五年)・『慶応義塾幼稚舎史目録(戦後篇)』(昭和四五年)以上四巻から成る大きな幼稚舎史の編纂がある。小学校史として世に誇るべきものであり、わが国の教育史上多大な貢献をしたと言えよう。

先生は趣味の豊かな、そして深い教養をそなえた巾広い人格の方であった。そのようなお人柄の先生が、格調高くしかも流れるような文章で綴った数多くの随筆は、先生の今一つの真面目であり、その多くは『犬・花・人間』(慶友社、昭和三二年)、『私の小便小僧たち』(コスモポリタン社、昭和三四年)、『柏崎だより』(港北、昭和五三年)に収められている。読み返すたびに、先生の恐いような「眼」に射すくめられる思いがする。

八月二三日柏崎市内の常福寺で行われた先生の葬儀は、遠方からの会葬者も多数に上り、先生のお人柄をよく偲ばせるものであった。

昭和五八年度三田史学会大会について

昭和五八年度の本会大会は、十月二十九日(土)三田キャンパスにおいて開催された。内容は左記の通りである。なお、総会において和田博徳教授が新会長に就任した。

研究 発表

国史部門 (10:00~14:00) 西校舎五二二番教室

1 「任那日本府」の機能

慶応義塾大学(大学院修士課程) 中野 高行氏

2 土地売買公券の基本的性格

慶応義塾大学(大学院修士課程) 田島 裕久氏

3 空海の弟子をめぐる ―実恵と実紹を中心として―

慶応義塾大学(大学院博士課程) 湯浅 吉美氏

4 信長公記 伝本間の異動について 藤本 正行氏

5 地祖改正反対一揆から自由民権運動へ

―和歌山県塾員児玉仲児の軌跡― 慶応義塾高等学校 高木 不二氏

6 近世北海道の村の成立

北海道庁総務部(北海道大学講師) 鈴江 英一氏

東洋史部門 (10:30~14:00) 西校舎五一五番教室

1 公孫述政権について

慶応義塾大学(大学院修士課程) 丸山 和昭氏

2 ムスリム史料によるノアの箱舟伝説

慶応義塾大学(大学院修士課程) 保坂 修司氏

3 西安・洛陽における遺跡 ―特に皇帝陵について―

慶応義塾大学(大学院博士課程) 太田 有子氏

4 伊尹説話の伝承と発展について

慶応義塾志木高等学校 三条 彰久氏

西洋史部門 (10:30~14:00) 西校舎五一六番教室

1 前四世紀におけるローマのイタリア征服

―カエレ(Caere)の場合―

慶応義塾大学(大学院修士課程) 野村 春路氏

2 Edward II 治世期に於ける Bastard Feudalism

—Lancaster 伯 Thomas の事例を中心として—

慶応義塾大学（大学院修士課程）上島 和彦氏

3 ゲッベルスと戦争宣伝

慶応義塾大学（大学院修士課程）滝川 潔氏

4 フリードリヒ・バルバロッサの帝国領国政策

広島大学（大学院博士課程）井川 泉氏

民族学考・古学部門

（10：00～14：00）西校舎五二二番教室

1 マライタ島社会の再組織化

慶応義塾大学（大学院修士課程）棚橋 訓氏

2 土器文様の組成比率からみた一括出土資料の分析

慶応義塾大学（大学院修士課程）羽生 淳子氏

3 関東・東北における縄文時代後期初頭の土器群

—編年的研究を中心に—

慶応義塾大学（大学院修士課程）稲村 晃嗣氏

4 考古学資料としての人骨

—三田済海寺出土牧野家遺骨を中心に—

慶応義塾大学（文学部専任講師）高山 博氏

公開講演会

（14：30～16：00）西校舎五一七番教室

初期日唐関係と争礼問題

慶応義塾大学（文学部客員教授）西嶋 定生氏

三田史学総会 公開講演会終了後

会場 西校舎五一七番教室

懇 親 会 （17：00～18：30）

会場 野口ルーム

昭和五八年度史学科旅行

本年度の史学科旅行は十一月十四日と十七日に行なわれ、参加者は四六名であった。国史専攻からは河北展生（教授）、村山光一（教授）、坂井達郎（助教授）が、西洋史専攻からは清水祐司（助手）の、計四名のスタッフが同行した。

なお、旅行スケジュールは次の通りであった。

（十四日）博多↓志賀島↓宗像大社↓二日市（泊）

（十五日）二日市↓大宰府↓中津（泊）

（十六日）中津↓宇佐↓国東町（泊）

（十七日）国東半島一周↓宇佐駅で解散